既に而て有す願
——方便化身土の願の形式——

加来雄之

親鸞は主著である『教行信証』「化身土巻」において、濁世無仏の時を生きる衆生の宗教心の課題を定散自力の執心として見出し、それを克服して如来の清浄願心海に帰入する道程の構造原理としての十九・二十の二つの悲願を示している。この方便の二悲願は、濁世の道俗にどのように用らくのであろうか、又、因位法蔵菩薩のいかなる精神を象徴しているのであろうか。

『大経』論・本願論とも呼ぶことができる『教行信証』六巻の綱格である真仮の八願の表現形式に注目するならば、二回向四法の十一・十七・十八・二十二願は「出於願」という形式であり、それに対し「真仏土巻」「化身土巻」に標挙される十二・十三・十九・二十願は統て「既而有願」という形式をとっている。このことは、親鸞が選択本願念仏の仏道に救済された事実を教学的に明確にしていく営為において、「覈求其本」していく時、因願の形式として「出於願」と「既而有願」という二種の相をとらなければ充全できないということを示唆していると思われる。

「願より出たり」が回向という願成就の因位であるとすれば、「既に而て有す」願の成就は酬報として示されている。つまり願成就が二回向四法と酬報仏土とされる根拠に法蔵因位の誓願の形式を見出したのである。その回向は如来が衆生の上に仏因として発起する構造を顕わし、酬報は如来大悲誓願海の摂取の構造を明らかにするものであるということができる。

しかし、真仮八願というも、その二形式というも、個々の願が孤立してあるのではない。親鸞は、善導の見出した「本願加減の文」を示唆として、四十八願というもこの根本願の展開であるとし、これは本願力回向の行信の根源であるばかりでなく、「真仏土巻」に、

> 発二四十八願一一願言　若我得二仏一十方衆生称二我名号一願二生二我国一下至二十念一若不二生一者不二取二正覚一今既　成仏即是酬因之身也、

という善導の「玄義分」の文を引用して、仏土酬報の根本誓願でもあるとしている。その根本誓願が展開する要を押えたのが真仮八願なのである。

では、濁世の群生において「既に而て願有す」という形式をとる願に酬報成就した仏身仏土とは、衆生の仏道においていかなる意義を顕わし、就中、仮の願海が酬報成就して方便化身化土となるとはいかなる課題を示しているのであろうか。共に「既而有願」による十二・十三の真仏土と十九・二十の化身土の関係を問うことによって方便の二悲願が仏身仏土として用らく意義を明らかにする。

仏身仏土とは何であるか。親鸞は、仏身仏土を荘厳功徳成就するということは酬報ということであり、仏土といっても「既而有願」の酬報成就として実在するのであり、それ以外のいかなる意味においても実在するのではないということを徹底している。真仏土だけではなく化の仏・土も願に酬報する限り報仏土であるとするのである。そのことを

> 夫按レ報者由二如来願海一酬二報果成土一故曰二報一也、然就二願海一有レ真有レ仮是以復就二仏土一有レ真有レ仮（「真仏土巻」）

と語り、仏土といっても如来の願海に酬報した事実を語るのであり、それは如来の願海が荘厳象徴されて我等に摂取の心光として感得されるということに他ならない。仏土が真仏土と化身土の二種をもって顕わされるのも、願海が真仮という二相をもっているからであり、前に述べたように、願海に真仮あるといっても唯一の根本誓願の真仮の面に過ぎない。それ故に

既以真仮皆是酬二報大悲願海一故知報仏土也、（「真仏土巻」）

と、仮の願海に酬報せるが故に仮の仏土であり、化身化土といっても「報中開化」（『樹心録』）という独特の理解が生じるのである。つまり、大悲願海が二種相として酬報するということは、二種の課題を荷負っていることを顕わしている。その真の願海とは「選択本願の正因」・「大悲の誓願」といわれるように、如来の「二智円満道平等」なる無為涅槃界・第一妙境界相を無量寿・無量光として象徴するのであり、仮の願海とは、

仮仏土業因千差土復応二千差一是名二方便化身化土一（「真仏土巻」）

と述べられるように、如来が千差なる「三界の衆生の虚妄の相」を縁として摂化しようとする方便の意欲を象徴しているのであり、それを親鸞は四十八願の中の十九・二十願に見出したのである。

このように、善導に代表される本願の仏道における仏土を報仏報土とおさえる伝統は、他の仏土観とは一線を画するものである。根本誓願に触れずして阿弥陀仏国を語るとき、報仏土であれば凡夫は往生できないし、凡夫が往生するのならば宗教的次元の低い応化の仏土でしかないという発想となり、又、報仏土と応化仏土とは無関係となり阿弥陀仏国はいずれであるかという諍論がおこることになる。これは、浄土建立の因願に味く、阿弥陀仏国を諸仏の相対国土の一つとして欣求することに依るのであろう。

それに対し親鸞は、曇鸞の願心荘厳の仏土観を基底に置きなお善導が阿弥陀仏国を報仏土と楷定した精神を継承しながら、仏土の既成概念を換骨奪胎し、特に化身土に新しく報としての意義を与え、真仮の二重構造によって衆生の摂取教化される具体相を明らかにしたのである。

このように方便化身土は仮の願海に酬報した如来の用らきを顕わすのであり、その仮の意義とは、随縁にして千差なる限定をもつ諸有衆生を本願の機として成就することに他ならない。仮の願海としての十九・二十願が明らかにされなければ、真仏土、不可思議光如来、無量光明土といっても、「斯の光に遇う者は三垢消滅し身意柔軟なり歓喜踊躍し善心生ず」と述べられても、この娑婆において生きる衆生においては超越的抽象的真理にとどまり、大悲誓願の具体相、実働性をもつことはできないのではないか。十九・二十願こそ、十二・十三願を根拠として衆生に具体的に係わり、かえって十二・十三願を大悲の願として内容付けるのである。換言すれば、真仮の内容を有する願海に酬報せる浄仏土であってこそ、煩悩具足の凡夫が穢土を生きて仏道を歩む根拠になることができるのである。

ここに十九・二十願が仏土を酬報する因位の願の形式である「既而有願」と表現される意義も窺い知ることができる。正しく十九・二十願は仏土の願なのである。

千差の相をとる方便化身化土とまでなって濁世・穢土を生きる諸有海に用らく「既に而て有す」仮の悲願海に触れしめられた時、われらは懺悔と讃嘆をもって「良に由有る哉」と表白しないわけにはいかない。